日本教科教育学会誌
2003.12　第26巻　第3号

中学校美術科学力の保持・剝落

広島大学大学院教育学研究科　三　根　和　浪

本研究は，一般成人が義務教育修了後，美術科教育における学力をどのように保持・剝落させているかという実態について把握・検証し，教科の枠組みや内容の再編成の一視点を示すことを目的とする。その結果，美術史の知識や心象表現・機能表現では，中学校3年生の時よりも現在の方が，学力が剝落したと認識していた。また，具象作品や抽象作品の美術鑑賞において，20才代以上では中学校3年生の時よりも現在の方が学力が向上したと認識していた。また現在の自己評価学力にも年代間で差があった。これらの結果から，生涯にわたって学習を続けていくために，自己表現やリテラシーの獲得といった視点で教科の総合化を行うことが可能であると考えた。

キーワード：美術科学力，生涯学習，表現・鑑賞・美術史，自己表現，リテラシー

Ⅰ．問　題

教育改革をめぐって，近年，学力低下論争が再燃している。しかし，これらの論争においては，図画工作科や美術科の学力が話題に上ることはほとんどない。昭和33年には文部省による全国学力調査（1958）として，小学校音楽科や家庭科などと共に図画工作科でも調査が実施されたが，OECDによる学習到達度調査（PISA）（2000）などをみても，近年はこのような調査自体がなかなか見つからない。学力低下批判における関心は，「読み・書き・計算」に関連する教科だけに向けられるようだ。やはり「学力」を育てる教科として美術が一般的な理解を得られているとは言い難い。それは，美術教育においてこれまで，具体的なデータをもとにして，何らかの学力が向上したとか低下したとかいった視点での検討が行われることがほとんどなかったことにもよるだろう。

しかし，生涯学習社会が到来している現状をふまえると，その基礎・基本を学校教育において培うことは必要不可欠である。美術教育においても，そのためにいったいどのような枠組みや内容が求められるかということを冷静に検討する必要に迫られている。それは，学校において行われる美術教育で学習した内容が，その後の個人の人生においてどのように生きて働いているか，あるいは，保持されたり剝落していたりするかなどを把握することによって可能になる。またそれは，美術教育のあるべき姿を見通す上で大きな示唆が得られる大切な視点となるし，美術教育の果たすべき説明責任の一つでもあるだろう。

そこで本研究では，以上述べたような判断の材料となる基礎データを得ることを第一の目的とする。また，これらをもとにして，美術科における学力の保持・剝落現象の有無について検証し，その特徴がどのようなものであるかを明らかにすることが第二の目的である。そして，これらの結果をふまえて，教科の枠組みや内容の再編成をもし行うとすれば，どのような視点が可能であるかを示すことが第三の目的である。

Ⅱ．方　法

平成14年12月から平成15年2月にかけて，広島県，愛知県，山口県，北海道，福岡県の小・中・高等学校の保護者を対象にして，「中学校期までの教科学習等に関する基本調査」を行った。

調査は，質問紙によって被調査者の「Ⅰ．性別

表1　美術科における学習内容別自己評価学力の変化

		中学3年	現在	t値		自由度
美術史	平均値	1.44	1.41	2.17	*	1975
	標準偏差	0.62	0.60			
具象鑑賞	平均値	1.45	1.61	−11.05	***	1969
	標準偏差	0.60	0.65			
抽象鑑賞	平均値	1.38	1.54	−10.51	***	1967
	標準偏差	0.58	0.63			
絵描・像作	平均値	1.68	1.47	15.50	***	1969
	標準偏差	0.72	0.67			
工作・工芸	平均値	1.70	1.57	10.38	***	1968
	標準偏差	0.70	0.67			

*: $p<.05$, ***: $p<.001$

や年齢等の属性」,「II．中学校3年時の各教科の好き嫌いや得意不得意，及び現段階での教科に対する有用感などの教科のイメージ」,「III．各教科の学習内容についての中学3年時と現在の到達度および有用感」を問うものであった。特にIII．は，各教科の学力を代表するような5つの学力を取り上げ，それぞれの学力実態についての回答を求めた。

本研究では，特にIIIで得られた到達度，つまり各学習内容についての中学3年時及び現在の自己評価学力を取り上げて分析を行った。美術科における学習内容とは「美術の歴史（変遷）」,「ゴッホ等の具象作品の鑑賞」,「ピカソ等の抽象作品の鑑賞」,「絵を描いたり像をつくったりすること」,「工作・工芸の作品をつくること」の5項目であり，これらについての自己評価学力，つまり中学3年時にできていたかどうか，また現在できているかどうかを問うている。そして，そのそれぞれについて,「大変そう思う」,「そう思う」,「そう思わない」の3件法で回答するよう求めた。

分析の手続きとして，まず上記の3件法で尋ねられた学習の到達度に関する回答を,「大変そう思う」：3点,「そう思う」：2点,「そう思わない」：1点と得点化した。そして，学習内容ごとの得点の平均値を「中学3年時の学力」と「現在の学力」とで比較するとともに，年代間で比較し，美術科学力の保持・剥落の状態やその特性について把握した。

III．結　果

最初に，美術科における学習内容別の自己評価学力が，中学3年時と現在とでどのように変化したかを比較した。その結果,「美術の歴史（変遷）」では，中学3年時よりも現在の方が，自己評価学力が低かった（$t(1975)=2.17, p<.05$）。また,「絵を描いたり像をつくったりすること」では，中学3年時よりも現在の方が，自己評価学力が低かった（$t(1969)=15.50, p<.001$）。さらに,「工作・工芸の作品をつくること」では，中学3年時よりも現在の方が，自己評価学力が低かった（$t(1968)=10.38, p<.001$）。つまり，美術史の知識，心象表現，機能表現という学習においては，中学3年時よりも現在の方が，学力が剥落したと認識されていることが分かった（表1参照）。

一方,「ゴッホ等の具象作品の鑑賞」の項目では，中学3年時よりも，現在の自己評価学力の方が高かった（$t(1969)=-11.05, p<.001$）。また,「ピカソ等の抽象作品の鑑賞」では，中学3年時よりも，現在の自己評価学力の方が高かった（$t(1967)=-10.51, p<.001$）。つまり，美術鑑賞においては，学力が剥落するのではなく，中学3年時よりも現在の方が，学力が向上したと認識されていることが分かった（表1参照）。

次に，美術鑑賞の自己評価学力が上がっている点に着目し，具象作品鑑賞の自己評価学力と抽象作品鑑賞における自己評価学力の平均値を美術鑑賞の自己評価学力として，美術鑑賞の自己評価学力を従属変数，年代および経過を独立変数とした2要因分散分析を行った。その結果を表2及び図1に示す。その結果，年代と経過との有意な交互作用が見られた（$F(5,1929)=7.68, p<.001$）。

そこで単純主効果を検討したところ，年代の単純主効果は現在において有意であった（$p<.001$）。Ryan法による多重比較を行った結果，60-70才代の美術鑑賞の自己評価学力は，10才代，20才代，30才代，40才代，50才代よりも有意に高く，20才代，30才代，40才代，50才代の美術鑑賞の自己評価学力は，10才代よりも有意に高いことが明らかになった（$MSe=0.38, p<.001$）。また，経過の単純主効果を検討したところ，20才代，30才代，40才代，50才代，60-70才代において有意であり（$p<.01$），これらの年代において，中学3年時よりも現在の方が，美術鑑賞の自己評価学力が高いことが明らかになった（表2及び図1参照）。

表2　美術鑑賞の自己評価学力の変化
：年代×経過の2要因分散分析結果

		平均値と標準偏差 中3	平均値と標準偏差 現在	主効果(F値) 年代	主効果(F値) 経過	交互作用(F値)
年代	10才代	1.50 0.62	1.45 0.63			
	20才代	1.46 0.59	1.71 0.70			
	30才代	1.44 0.58	1.65 0.63	5.24*** (5,1929)	68.64*** (1,1929)	7.68*** (5,1929)
	40才代	1.49 0.58	1.72 0.62			
	50才代	1.46 0.63	1.71 0.63			
	60,70才代	1.59 0.60	2.18 0.71			

注1）平均値と標準偏差は，上段の値が平均値で，下段の値が標準偏差
注2）F値欄の（　）内は自由度
注3）***：$p<.001$

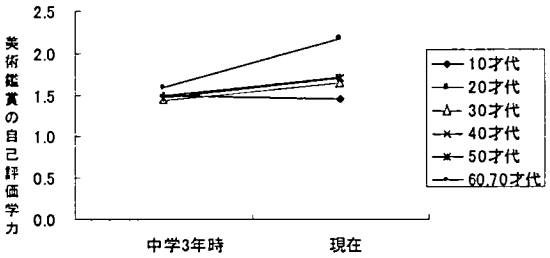

図1　美術鑑賞の自己評価学力の変化

IV. 考　察

一般成人における中学校美術科学力の保持・剝落といった現象については，学習内容による違いや年代差があることが明らかとなった。これは，義務教育を修了した後の個人の人生経験において，美術科における学習内容が再度どのように使われたり必要であったりしたかということに関係している可能性がある。

心象表現や機能表現及び美術史の知識といった学力が剝落していると認識されていたことは，義務教育を修了した後に，造形表現したり美術史の知識が求められたりする機会がなかった実態を反映しているように思われる。

また一方，美術鑑賞の自己評価学力について，10才代よりも20，30，40，50才代の方が高く，60-70才代がそれ以下の年代よりも高いと認識されている事実，また，20才代以上で美術鑑賞の学力が向上していると認識されている事実は，義務教育修了後，特に社会に出てからの人生において，美術作品を中心とした視覚芸術を解釈するような場面があったり，美術鑑賞に関連する何らかの機会があったり，またさらにそれらが価値づけられていたことを推測させる。美術作品とは呼べないものであっても，身の回りのさまざまなものは，美術の主要な情報である視覚情報によって認知されることが多いため，広い意味で視覚情報の学習の機会が人生に提供されていることが影響しているのかもしれない。また加齢を経て人生経験が豊かになることをふまえて，作品についての解釈が豊かにできるようになることも影響していると言えるだろう。

以上のことから考えると，表現の学習においても鑑賞の学習においても，生涯にわたって学習し続けられるための基礎・基本の習得に焦点化し方法知を獲得することが，やはり美術の学習の大きな課題である。これらをふまえて，今後の美術教育のあり方を改善の視点で考えてみたい。

［表現・美術史学習の改善］

造形表現に対する関心・意欲を高め生涯にわたって学習を続けられるような内容の獲得と方法の充実が求められるだろう。もちろん現状においてもこれらは求められているが，学齢期においてさまざまな材料体験をしておくことや，興味・関心を高める導入の工夫，そして結果として基礎・基本を確実に習得できるようにすることが，さらに求められる。美術史学習においては，ゲーム・クイズ的な要素の導入も効果的であろう。そのことによって，義務教育修了後も美術に関連したさまざまな学習が継続されるようになり，谷川（2002）の提唱する60歳学力へのつながりもスムーズに行われることになると思われる。

［鑑賞学習の改善］

義務教育修了後にも生涯にわたって美術作品などを鑑賞し愛好することができるようにするために，ものの見方や美術鑑賞の基礎・基本の習得が求められるだろう。

中村・谷川（1993）は，現代美術を鑑賞するうえで効果的な見方として，「線のウォッチング－近よったり離れたりしてみよう」「円のウォッチング－作品のまわりをぐるりと歩こう」「点の

ウォッチング－立ち止まって観察し考えよう」を挙げている。これらは，生涯にわたって美術作品を鑑賞し愛好する基礎・基本の一つである。

また児童の実態から始まる鑑賞学習を構想し三根（2001）は鑑賞学習のオープンエンド化を提唱した。これは，文化遺産の伝承としての側面を強調する美術鑑賞ではなく，作品から発信される造形情報を自分なりに読み解くなかで造形に関するリテラシーを獲得する方法の一つである。鑑賞学習におけるこれらの方法や考え方は，これからの造形学習において望まれる学習の一つとなるだろう。

［教科総合化の視点］

表現と鑑賞の学習をさらに生涯にわたっての学習に対応させようとすると，教科の枠組みを「自己表現」という構造の中での「リテラシーの獲得」という視点で総合化する可能性が浮上する。

ここで自己表現とは，何らかの体験などの刺激の受容を契機として，心の中に揺れが生じ，それを言葉，音・声，身体の動き，色・形・素材などに変換して，外に現れ他者に伝わるようにする一連の行為を指す。図２で明らかなように，伝えるための媒体の違いこそあれ，文学も，音楽も，身体表現も，そして造形表現も，表現をする中身を何らかの媒体を使って外へ表し現れるようにするという構造において共通している。したがって，これらの一連の行為全体を「自己表現」という視点で総合化することが可能ではないか。

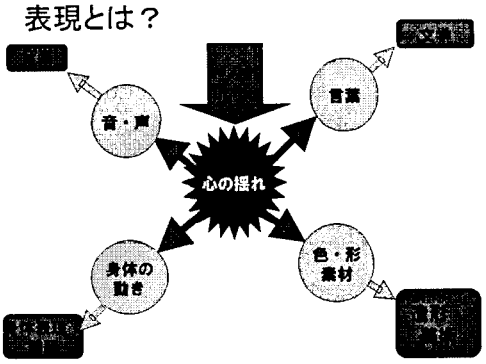

図２　自己表現の構造

例えば，表したい内容を絵で表したり，それを言葉表現したり，身体表現したり，あるいは合唱表現したりといった展開をすることによって，表現する中身や方法は互いに強く関連づけられ，学習者にとってさらに意味深いものになるだろう。そして，これまで自己表現が分断され行われてきた教科の授業の時よりも，さらに多様な視点から自己や他者を見つめることにつながり，生涯にわたって自己表現することの必然性を，学習者に強く認識させるようになると思われる。

付　記

本研究は，平成14年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)課題番号14380113　研究代表者：大槻和夫安田女子大学教授）による「生涯学習の基礎基本を培うための教科教育の枠組みと内容の再編成」への支援を受けて実施された。

本研究データの整理・分析にあたって，広島大学大学院学習科学専攻学習開発基礎専修　高橋均氏の協力を得た。付して感謝したい。

引用・参考文献

国立教育政策研究所（編集）：生きるための知識と技能－ OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2000年調査国際結果報告書 OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）－調査国際結果報告書－2000

谷川彰英：21世紀型の学力論の構想，日本教科教育学会誌第25巻第３号，pp.53-57，日本教科教育学会，2002

中村英樹・谷川渥：アート・ウォッチング　現代美術編，美術出版社，1993

三根和浪：美術鑑賞教育におけるオープンエンド化，アートエデュケーション　No.30，pp.73-81，建帛社，2001

文部省調査局調査課：全国学力調査報告書，小学校－音楽　図画工作　家庭　教科以外の活動　中学校－英語　職業・家庭　高等学校－英語　保健体育　昭和33年９月25日実施，1959